

宮沢賢治『カイロ团长』

とのさまがえるは、よろこんで、にこにこにこにこにこ笑って、棒を取り直し、片っぱしからあまがえるの緑色の頭をポンポンポンたたきつけました。さあ、大へん、みんな、

「あ痛つ、あ痛つ。誰だい。」なんて云いながら目をさまして、しばらくきよろきよろきよろきよろしていましたが、いよいよそれが酒屋のおやじのとのさまがえるの仕業しわざだとわかると、もうみな一ぺんに、

「何だい。おやじ。よくもひとをなぐつたな。」と云いながら、四方八方から、飛びかかりましたが、何分とのさまがえるは三十がえるりき力あるのですし、くさりかたびらは着ていますし、それにあまがえるはみんな舶来ウエスキーでひよるひよろしてますから、片っぱしからストーンストーンと投げつけられました。おしまいにはとのさまがえるは、十一疋のあまがえるを、もじやもじや堅かためて、ぺちやんと投げつけました。あまがえるはすっかり恐れ入おそって、ふるえて、すきとおる位青あざくなって、その辺に平伏へいふくいたしました。そこでとのさまがえるがおごそかに云いいました。

「お前たちはわしの酒を呑のんだ。どの勘定も八十銭より下のはない。ところがお前らは五銭より多く持っているやつは一人もない。どうじゃ。誰かあるか。無なかろう。うん。」

あまがえるは一同ふうふうと息をついて顔を見合せるばかりです。